

教職の意義及び教員の役割 について学ぶ地域活動

Local Activities that Promote an Understanding of the Teaching Profession's Significance as well as the Role of Teachers

開 仁 志
HIRAKI Hitoshi

I 目的

中央教育審議会の答申を受け、教員養成の在り方を審議していた教育職員養成審議会は、1997（平成9）年、文部省（現文部科学省）に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について^①」と題する第一次答申を出した。その中で、いつの時代も教員に求められる資質・能力を、「専門的職業である『教職』に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能等の総体」「『素質』とは区分され後天的に形成可能なもの」と定義し、今後特に求められる具体的資質・能力を、以下の3つとした。

- ・地球的視野に立って行動するための資質・能力
- ・変化の時代を生きる社会人に求められる資質・能力
- ・教員の職務から必然的に求められる資質・能力

この中で特に重視されたのが、「変化の時代を生きる社会人に求められる資質・能力」である。具体的には、論理的思考力、課題解決能力、社会性、対人関係能力、コミュニケーション能力、自己表現能力などであり、「教員は教

職という専門職に従事する社会人である」と強調されている。

本稿では、「変化の時代を生きる社会人に求められる資質・能力」を育てることにつながると思われる教職を目指す学生による地域活動を取り上げる。その活動の中で、学生が教職に対して意義を感じ、教員の役割を自覚し、自己研修を積み重ねて向上していく過程を明らかにする。

II 方法

各大学で行われた、教職を目指す学生による地域活動を支えた教員や学生の姿を実践報告書の分析、インタビューをもとに、考察する。

<対象校>

- 1 信州大学
- 2 上越教育大学
- 3 茨城大学
- 4 富山大学

III 結果及び考察

- 1 信州大学における事例

- (1) 信大Y O U遊サタデーの発足

信州大学教育学部では、教育実習事後指導で、教育実習で得たことに関するアンケート調査を行った。その中に、「相互参加実習の期間が短かったので、もう少し実習を続けたかった」という声は何人もあった。このような教育実践経験を積むことへの強い要望があることを信大Y O U遊サタデーを担当する大学教員土井⁴⁾は感じ、教育学部キャンパスに子どもたちを呼んで実践をすることを思い立った。「学生の教育力」への着目は、学生は講義をきちんと受けるべき存在という受け身的な学生観から、自ら活動する主体としての学生観への変容が窺える。

(2) Y O U遊サタデーの変遷

1996(平成6)年度から始まったY O U遊サタデーは、2000(平成12)年度まで行われ、2001(平成13)年度からはY O U遊プラザと名称の変更がなされた。学生側からは、「教育実習では学習指導案の検討ばかりで、まったく子どもと触れあえなかった」という不満、「学級経営はできなかった」という不満があったことが起点になっている。さらに、「イベント型の活動で子どもと1日だけの触れ合いでは名前も覚えられない」、「子どもをお客さん扱いするのでやめたい」という声があがり、1年間の継続型で従来のイベント型であった活動をもっと子どもと長期に渡って触れ合いたいという学生のニーズにも応えられるような取り組みとして活動が組まれた。

2003(平成15)年度では、Y O U遊ワールドという名称に変わった。土井によると、「今までは大学にどうぞ来てくださいと子どもを引き寄せ集めていた。しかし、これからは、地域にどんどん出て、対等な形で大学生と相手方が連携できるところ、地区の公民館、児童館など地

域の団体、施設をつのった」とのことである。

「何カ所も依頼があったが、今のところ11カ所と連携をしようとしている。その団体に学生の教育を全面的に任せ、学生がお手伝いをしに行くのではなく、学生が企画段階から入ることが条件であると考えている」とのことである。

このY O U遊サタデーからY O U遊ワールドへの変遷を概観し、気付く重要な点がいくつもある。まず、学生自身のニーズから始まり、時代のニーズを教員がとらえ、変遷していく点である。さらに、時代のニーズに合わせて形を変えていっていることである。地域との連携の在り方、教育学部に求められている役割などを大学教員が察知しながら、しかも、学生と話し合って形を変えていっている。

4年のAさんによれば、「活動の内容、実行委員などは、前年度の12月から3月にかけてじっくりと話し合われる。来年この活動自体を続けるかどうかも議題に上り、大学教員も交え、学生同士で話し合われた結果、3月に新実行委員会が発足し、来年度の計画を立てる」という。自分たちで決めたことが実現されていき、子どもと触れ合えることへの充実感は、学生達が教職への意義を感じる源になっていると推測される。Aさんは、「その話し合いの中で、生みの苦しみとも言うべき対立が起きる。しかし、苦しんで苦しんででもあきらめないでやったことだから成長できる。そして、1年間やり遂げると学生達の顔つきが違う」と言う。

(3) 意欲を支える環境

実際にY O U遊ワールドを運営している実行委員会のメンバーにインタビューを行った。A君は、「友達に誘われてやり始めた。Y O U遊ワールド以外にもいろんな活動があるが、(例えば、外部のボランティア等)どれをやればい

いかわからなかった。自分からやってみたくてという芽生えがあったのは、このYOU遊ワールドであり、やめられなくなった理由は、かかわった子どもをこのままほっておけない、もっとかかわりたいという心が自分の中で芽生えたからである」と言う。

B君は、「小学校の先生を希望していた。子どもとのかかわり方を得意分野にしたいと思った。YOU遊ワールドの環境が魅力的である。身近な人がやっていて、意見を聞くと活動に対しての評判がいいから始めた。みんなとつくっていくことにより意識が高まる。自分のもっている疑問も身近に感じられる」とのことである。

Cさんは、「高校時代からYOU遊ワールドの実践を知っていた。やりたくて入ってきた。地域の子どもが、学生によって大学構内につくられたプレーパークに遊びに来てくれるので、地域の人に手を振ってもらったりして、地域にとけ込んでいる感じがする。大学にこのような活動があり、身近にあることで先輩へのあこがれから、あなりたいと思った」と話してくれた。

D君は、「先輩がやっていることから活動を知った。子どもとのかかわりが多いことが魅力。子どもが変わる実感を味わえることや、うまくいかないときに悔しい気持ちで自分を見直しができる。1年だけでは終わりたくないから、企画の代表を務めた」とのことである。

E君は、「子どもや、保護者、地域の人など様々な人に出会えるのが魅力」と言う。

F君は、「YOU遊ワールドがあるから大学に来た。子どもとの触れ合いが少ないのに、勉強だけでなんとなく自信をもっていることが不安だった。やればやるほど自分の力不足が見えてきて、それを克服するために続けている。先

輩の姿が大きく見える。そうになりたい。続けると子どもに愛情が出てきて、ほっとけなくなる。単位にとって終わりにしたくない」という思いが聞かれた。

Gさんは、「初め、この活動の話を聞いてさほどやりたいという気持ちではなかった。しかし、1年の時の教育参加を終え、もっと子どもとかわりたい思いから、どうしてもやりたくなった。学校内の活動であること、先輩がいることなどから、活動しやすそうで、楽しそうだったからよかった。自分にもっとできることはないか探すようになった」と言う。

4年のHさんは、引退して先輩の目から語った。「土井先生の熱意が伝わってくる。親身になって活動してくれる。学生がやりたいことをするための補助をしてくれる。子どもは一人一人違うので、自分の未熟さを知り、見えてくるともっと成長したいという気持ちがわいてくる。現場に出たときに子どもをどれだけ見守るかが養われているか、表面だけではなく裏まで読みとれるかが大事。未熟な自分と向き合うのはつらいけど、だから成長できる。先輩から見ると、みんなの成長が見える。口を出す面と見守らなきゃいけない面がある。3年生のときは、みんなを引っ張らなくちゃと思った。みんなを見ていて自分が悩んでいたことを思い出せ、振り返られる。学生スタッフの力を結集する体験は、総合的な学習と共通だ」と言う。

この学生達のインタビューからは、大学内に子どもと触れ合うための活動が目に見える形で身近にあることのメリットが推測される。大学に入って、初めは何をすればよいかもわからなかった学生が、先輩の一生懸命活動している姿を目の当たりにしたり、体験を聞いて誘われたりすることによって、安心して活動に取り組む一歩を踏み出している。中には、高校時代から

活動に興味を持ち、この活動があるから大学に入ってきた学生もいる。これは、大学が地域に向けて情報をきちんと発信し、それが受け止められている証拠であると言えよう。やってみることで、自分の足りないことに自分で気づき、自己を高める努力をしようという意欲につながっている。さらに、その努力を陰で支えてくれている教員と、先輩の存在が大きい。

以上のように、子どもとかかわる活動を仲間とともに協力しながら行うことで、学生は、教職への意義をより深く感じ、教員の役割について自覚するようになっていていると考える。

2 上越教育大学における事例

(1) 学びのひろばの発足

学生自身が、企画、準備、運営することを目指す「学びのひろば オン キャンパス」は、当初学生募集から、基本計画づくり、案内状作成、実行委員会の組織づくりまでの全てを大学教員の指導の下で展開しなければならなかった。しかし、大学には、フレンドシップ委員会が組織され、受け入れ機関を含めたフレンドシップ事業企画運営協議会もつくられたことから成功裡に展開した⁶⁾。これは、教員が計画的に体験的な活動をカリキュラム化する意図のもと始めたことが影響し、初めは、教員主導で行われ学生はどちらかといえば受身であったのではないかと推測される。

しかし、平成12年度に信州大学で開催された「フレンドシップ全国学生シンポジウム」に参加したことに刺激され、学生事務局が組織され、「学びのひろば」は完全に学生主体の事業に移行した。予算的な裏付けもできたことから、国立妙高少年自然の家での1泊2日の「学びのひろば イン 妙高」と、「学びのひろば オン キャンパス」の2大イベントを展開で

きるようになった⁴⁾。

「学びのひろば」での目的は、①自ら企画、準備、運営することで、逞しい実践力を培う。②子どもたちとの触れ合い活動で、安全に配慮し、責任をもって子どもたちとの活動に当たる心構えを培う。③子どもたちとの触れ合いを通して、子ども理解を深めさせる。である⁶⁾。

以上のことで注目されるポイントは、学生の意欲向上につながった「フレンドシップ全国学生シンポジウム」である。同じような立場の学生の姿を見ることで、教職の意義を感じることに大いにつながることを示していると考える。

(2) 活動の変遷

このような「学びの広場」に対して、校長会と大学で構成する教育実習連絡委員会では、教育実習終了後に話し合いを設け、受け入れ教諭対象にアンケート調査を行い課題を明確にして改善に努めている。その結果は、子どもとのかかわり方への積極性、教育実習後も継続的に学校行事に参加する学生の増加等が指摘され、好評とのことである⁶⁾。学生達は、教職への意義をより深く感じ、積極的に活動していることが窺われる。

しかし、教育実習直後にフレンドシップ事業と教育実習のかかわりについて学生を対象としたアンケート結果は、「学びのひろば」を経験後すぐに行ったアンケート結果を下回った。すなわち、経験直後は、98%の学生が有意義であったとしたのに対し、「学びのひろば」を1回だけ体験した学生は、教育実習に生かされなかったという回答が多かったのである。その一方で2回3回と繰り返し行っている学生は、評価が高かった。学びのひろばを担当する大学教員、濁川は、この結果を経験が実践的指導力の基礎として身に付くかどうかは、子どもたちと

のかかわり方の質、かかわった経験をいかに振り返るかにかかっていると分析する⁹⁾。

このアンケート結果の反省をもとに、学生事務局との話し合いがなされ、平成14年度に大幅な改善が行われた。「同じ子どもたちと年間を通して関わっていこう」ということであり、「学びのひろば」を「学びクラブ」という名称に改め、年度当初にクラブ内容を児童に示し、参加希望を取り、登録された児童と毎月活動を通して触れ合うというものである。

継続的な触れ合いに移行したことにより、学生の変容として以下の5つの成果が表れたとされる。①大半の学生が児童の名前を覚え、一人一人の児童に目がいくようになり、一般的な児童の傾向「今時の子どもは」というように話す学生が減った。②活動プログラムを児童の実態や希望に基づき大幅に修正を加えていくことができた。③イベント型の触れ合い活動では、円滑に展開することだけに目が奪われがちで、子ども集団という視野でしか見られない傾向があったが、多様な子どもたち一人一人に対応する力が出てきた。④「学びのひろば」では、事務局任せの傾向が強かったが、クラブ単位での企画・準備が為されることにより、大半の学生が自分たちが運営しているという意識をもっていた。⑤以前は大学教員が活動材料や機材を全部準備しないと動かなかった触れ合い活動が、学生自身が主体性と知恵を働かせ、購入しなくても身近なものを代用したり、所有する者を集めて利用したりするなどして、必要最小限の準備ですむようになってきた。

現在は、3年次の学生が中心になりフレンドシップ活動の本部を担う。常時30名ほどの学生が学びの広場、妙高での宿泊などの企画、運営を行う。企画ごとには、企画委員会がつくられ、2年生を中心に結成される。実際に子どもと

接するのは1年生が中心になる。3年次に教育実習があるので、その間活動ができなくなるのが悩みだという。4年次は教員採用試験の準備、卒論があるため引退して、後輩のサポート、相談役になる。フレンドシップ委員会の本部の部屋が設けられて、その場所を中心に活動する。

学生が主体となる「学びのひろば」では、学年ごとの役割が決められてきている等の計画性も見られ、継続した子どもとのふれあいの中で一人ひとりの子どもへの対応ができるようになったことや、クラブ単位として活動単位を小さくしたことで学生一人ひとりに自覚と責任が生まれつつあることが成果として挙げられる。

計画的、継続的に活動が組まれることで、学生が教職の意義をより深く感じ、教員の役割に対する自覚をもつようになってきていると考える。

3 茨城大学における事例

(1) ハートファクトリーの発足

2000(平成12)年から、ワークショップ「ハートファクトリー」が始まる⁹⁾。この活動は、近代美術館が主催する子どもを対象とするワークショップに、学芸員と大学教員が中心に、学生も交えて企画から運営に至るまで実践するものである。

年間を通じて行われる活動の中には、実際に子どもと触れ合い気づいたことを元にした反省が次の活動に生かされるというメリットがある。ハートファクトリーの活動は、オリエンテーションが1回、実際に制作活動をする授業が4回行われる。その他に、授業以外での活動が数え切れないほどある。インターンシップのとりくみとしても位置づけられているこの活動では、打ち合わせも頻繁に行われる。真剣に取り組めば、1年間が美術館の活動で一杯になる。しかし、その中で、社会人としての在り方

を学び、実際に企画をして、学生が組織だった動きを見せていく⁽⁴⁰⁾。

筆者が行った学生へのインタビューでも「企画段階から参加できるので魅力的」という言葉が聞かれた。ハートファクトリーを担当する大学教員、島田は、「企画し、頭で考えるだけでなく、実際に試作することが大事」と力説した。そのことによって、実際に悪いところ、子どもにとって魅力の鍵となるものがわかる。学生自身が、その教材のもつ魅力に気づき、没頭するほど熱中して、実感することが大切であろう。

企画段階から活動に取り組むことで、責任感が生まれる。また、教材研究を繰り返し行うことで、子どもと教材との出会いを実感できる。そのことが、教職の意義や教員の役割をより深く感じることに繋がっていると考えられる。

(2) 学校現場につながる力

この活動を終えて卒業し、教員になった学生が、何が役立っているか述べている。その中にいくつかの注目すべき点がある。「ほとんど経験のない初めてのことばかりだったので緊張しながら無我夢中でやりました。そして、その時に参加してくれた子ども達の反応や他のスタッフに助けってもらったことは、今でもはっきりと覚えています⁽⁴¹⁾」。「学生時代に経験できた美術館での美術活動と学校の美術の授業の両方のよさを比較できることは、今後の私にとって大きなプラスにしていけると確信しています⁽⁴²⁾」という言葉には、学生時代でしかできない体験としてのワークショップへの認識がある。苦しいことがあっても支えてくれる存在があることへの感謝を感じ、次に進もうとする力が感じられる。

さらに、学校現場に出ると、授業での子ども

の姿を見ることが主となるが、学生時代に、違った形で子どもと接していることで、様々な子どもへの見方、授業への取り組み方などができるようになるのではないかと考える。そのことが、授業改善への糸口になる。「悩んだとき、行き詰まりそうになった時に、フッとあの頃行っていたことを思い出し、形を変えて行うことがあります⁽⁴³⁾」、「企画している私たち自身がめいっぱい楽しんでいた⁽⁴⁴⁾」と過去の体験を振り返りながら、授業に取り組んでいる。このことから、学生時代に一生懸命に夢中で取り組んだ経験そのものが、卒業後も教職に対する意義を感じさせ続ける精神的な支えになると考えられる。

(3) 学生の価値観、認識の変容

美術館や附属学校園の子どもとの活動の中では、子どもへの認識も変わっている。「子どもと話すことが楽しかったんです。近くに子どもがいる訳でもないし。保育園がある訳でもないし。でも美術館に行けば子どもがいて、関わられるって⁽⁴⁵⁾」、「子どもってこんなこと思ってるのかなって思った。予想じゃなくって、実体験だからね⁽⁴⁶⁾」という言葉から、美術館で子どもと実際に触れ合うことによって、漠然とした子ども像から抜け出していることがわかる。

島田の言葉に、「あたりまえ、正解と思っていたことを疑問に思うことが大切」というくだりがあった。「学校現場の世界は小さな認識でしかない」と言う島田は、「今までのものを全て捨てて、ゼロから出発できるような見方ができるとよい」と考えていた。「ものづくりには、正解がない」、「自分でアレンジし、提示できるような能力が必要である」、「ワークショップを見て、現実的でない。うちでは使えないと言って、すぐに結果を求める教師が多い

が、自分なりに何かを学び、自分のマニュアルを作り、使えるようにするのが教師の役割である」と言う。この指摘は、成長が止まる教師と、自ら成長していく教師の違いを明確に表している言葉のように感じた。

(4) 学生を支える体制について

学生の成長を支える環境としての学芸員と大学教員の役割はどのように果たされるべきか。学芸員の山本によると、「学生が主体であり、大学、学芸員はサポートの立場である」ということである。「学生が、(現場に)1番に来て、1番遅く帰る」という言葉には、学生が、自らの問題として活動に責任をもって取り組んでいる姿勢が窺える。準備段階の流れをまとめると、①学芸員が企画を出す、②学生が試作をする、③大学教員がカバーする、④学芸員が企画を承認する、⑤現場で学生自身がふくらますといった過程になる。

大学教員、学芸員は当日はサポート役になるが、明確な役割がある。①学生自身が気づかないポイント(例えば安全面や、活動が進む上で外してはいけない援助等)を示唆する役割、②新たな視点を与える役割(例えば、子どもからの視点、教材のとらえ方、遊びの発展の仕方等)、③学生自身の成長を教員自身が感じ取り、頑張りを認める形成的評価活動を行う役割である。

全く外部に出てボランティア活動などをするのとは何が違うか。それは、学生の身近に目に見える活動があることである。大学内に頑張っている先輩の姿、同級生の姿を見ることが周りの学生に与える影響は大きいと考える。やってみようというきっかけは、「身近にその活動があり、おもしろそうと思った」という答えがインタビューの中で多かった。「先輩や友達に聞

いて、やってみようと思った」というものも多かった。

学生にとっては、活動を大学教員が支えてくれているのも力強いであろう。目に見える活動の大切さを、島田は「以前は、教職課程は何年か後にわかればよいと思っていた。しかし、その場で何らかの形で見えるものを残すことの大事さを思い直した」と述べる。

このことは、学生自身が、養成段階から継続的に子どもとかかわり教職の意義や教員の役割に気づき、成就感をもつように、大学が、責任をもって何らかの結果を出していくという意識が窺える。

4 富山大学の事例

(1) 親子フェスティバルの目的

富山大学親子フェスティバルの目的は、「学生」、「地域住民(主として親子)」、「大学」という3者を、手仕事を中心としたものづくりや遊び活動を通じていかに有機的に連携できるかという点である。フェスティバルをすることにより、「学生もよい」、「地域もよい」、「大学もよい」活動をいかに創り出せるかということであり、大学と地域の連携のあり方を探る実験的な取組と言える¹⁷⁾。

上記の目的は、活動の特徴を端的に表していると言えるだろう。「学生もよい」という意味だが、企画、準備、運営、外部との連携、実施、後片付け等の一連の流れを全て学生が主体的に行うという点にある。このことにより、学生は受身的な存在、単なる便利な労働者という存在ではなく、主体者としての存在に位置づけられる。主体者としての位置づけにより、学生は自己効力観をもち、自己実現していくことが可能になると考える。このことが、責任感をもった教員の役割を自覚することにつながる

考える。

(2) 学生同士の協力体制

親子フェスティバルが他大学の活動と大きく違うところは、教員養成を行うことが第1の目的ではないことにある。この特質から、学生たちは、様々な専攻に在籍し、希望職種も違う。メンバー構成の半分は、教職志望だが、それ以外の職種につきたい学生も多い。当然、各々の価値観も違ってくると言えよう。また、各専攻ごとに決められた単位科目があるため、普段の授業では、学生同士が専攻の枠を超えてかわりをもつことは少ない。普段かわりをもってこなかった学生たちが、「親子を相手にして楽しく活動できる」といったねらいだけは共通としながらも、各企画ごとに活動を進めるので、思いのズレが生じる。このことから、学生同士の間で、よく話し合いがなされ横のつながりをつくる必要性が最重要課題となる。そのズレを修正し、活動を成功に導くのが本部の役割である。価値観が違うもの同士をどう有機的に結合し、活動を成功に導くか、まさに、教員の役割として重要なコーディネートする力が必要になってくるのである。

さらに、先輩と後輩という縦の関係も培われる。まず、先輩から後輩への技術伝達がある。フェスティバル発足当初から行われてきている「巨大迷路」や「ちびっこ迷路」では、冷蔵庫等の巨大な段ボールを集め、組み立て、迷路にしていく技術、段取りなどがスムーズに伝わっていく。参加学生数が増加した今日では、教員が一人一人の学生に全て教えることは不可能であると言えよう。逆に、新企画や、先輩がいなかった企画は技術、段取りの伝達がスムーズにいかないために苦勞を強いられる。新企画、そして、2・3年生が活動から抜けた企画などは、

一からの出発と言ってよく、手探りで企画を進めていかざるを得なかった。その分、自分たちでなんとかしなくては行けないという責任感から横のつながりを強くしていった傾向がある。しかし、実際に経験した先輩がいるかないかで、技術、段取りの面でどうしても遅れをとる形になった。

先輩・後輩がどのような関係かにも企画の成功がかかっているとも言えよう。ある企画では、過去において先輩の権限が強く、1年生は、自分のやりたい活動をするといったよりも、言われたことをこなすという形であったと参加メンバーが語った。そのことで、充実感を持てず1回限りの参加で終わった学生が多く、2・3年生不在のメンバーとならざるを得なかったという経緯がある。その他にも、ちびっこ迷路では、幼児・小学校低学年を対象とするため、幼児教育のメンバーが多かった。しかし、幼児教育なら参加して当然という雰囲気ができ、そのことが、却って主体性を基にした活動であるはずのフェスティバルのよさを損ない、幼児教育参加メンバーが減ったという経緯がある。

以上のことから、仲間同士の横や縦の関係がいかにか有機的に結ばれるかが活動成功の鍵を握ると考える。

(3) 周囲のサポート体制

学生の成長を支えるための教員の姿勢はどうだったか。世話教員である竹井は、「まず、学生のみなさんがやりたいという気持ちをもってやるかどうかです。やりたいという熱意が伝われば、その熱意に応えるために、みんなが動く」と学生に語りかける。「やらされている活動からは何も生まれてこない。要は、その活動自体をどこまで自分のこととして自分自身に引き寄せ、真剣になれるかだ」と語る姿勢が、学

生を真剣にさせるのだと考える。基本的には、学生が企画、段取り、運営等を考え、わからないことがあれば、先輩に聞いたり、教員に聞いたりする。全ての始まりは学生からというのが基本姿勢である。

しかし、教員でなければできない仕事、大学全体のサポート体制づくり、予算のこと、他の教員との折衝など、学生には見えない部分の活動を支える根幹の部分がたくさんある。

また、学生同士だけでは、なかなか見えてこない部分を指摘し、軌道修正する役割が大きい。例えば、巨大迷路やちびっこ迷路は、1日目と2日目で迷路の中身を変える。時間ぎりぎりになっても、改善点をズバリと指摘する。他にも、お菓子のアトリエでは、去年の活動の他に、できるだけ大きなお菓子の城をつくるといった課題を与えた。初め、学生は、しり込みしたが、「できないと思ったらそこで終わりだ。できる可能性を追及しないとやる意味がないだろう。大体、やっていて震えるほど楽しくないだろう」といった竹井の言葉により、挑戦し、見事やり遂げたのである。デジタルアスレチック忍者屋敷では、普段ソフト面を扱うことが多い学生が、会議ばかり行い何も準備しない姿を見て、「とにかく、やってみてつくってみて試してみないと見えてこないものがある。とにかくやってみろ」と励ました。科学で遊ぼうでは、理科教育の学生が多い。理科教育の教員に聞き、実験をただ見せると言った学生に対して、「何か一つでもいいから、フェスらしいものを + a しないと意味がない」と課題を与えた。そのことにより、実験がより子どもにわかりやすい形で伝わるように実験ショーの形をとることになり、好評を博した。

以上のような、飽くなき教材研究、追及の姿勢が、慣れからくる惰性を廃し、緊張感をもつ

た活動を支えていると言える。この精神は、フェスティバルを経験した学生にも受け継がれ、先輩から後輩に伝えられている。このような雰囲気をつくるためには、教員自身が教材に精通し、学生が今どのような状態なのか把握し、企画の魅力の根幹は何かを分析し、活動成功にはどのような要素が必要かをしっかりと理解していることが必要となると言えよう。

まとめ

教職を目指す学生による地域活動の中で、学生が、教職に対して意義を感じ、教員の役割を自覚し、自己研修を積み重ねて向上していく過程には共通点が見えてくる。

1 学生が主体であること

どの地域活動においても、学生が主体となって企画、運営し活動を進めていくという基本姿勢が取られている。学生が受け身になることなく、あくまでも大学教員はサポート役に徹する、あるいは、対等に活動を進めていく。そのことで、学生は活動を自分自身のこととしてとらえ、責任感が育まれ、教員の役割を自覚する。

2 実体験を大切にすること

子どもと実際にかかわる、試行錯誤して教材研究に取り組むなど自ら進んで体験することを軸として活動が進められていく。そのことで、子どもの成長を支える教職の意義や教員の役割について深く学ぶ機会になっている。

3 学生、地域、大学教員の協力体制があること

学生同士協力し合う活動や地域とのつながりを大切にした活動、学生と大学教員が対等な関係で目的に向かって取り組む活動が組まれている

る。そのことで、教員の役割として重要な人と人をつなぐコーディネーター力が磨かれる。

4 自己研修していく姿が求められていること

大学教員が指導していくのではなく、学生自身が自分たちで気づき、考え、行動することが求められている。教員の職務内容としての研修を自ら進めていく態度が養われている。

5 地域とのつながりがあること

地域とのつながりをもつことにより、子どもをとりまく地域環境に目がいくようになり、将来教職についたときに、地域とつながりを持ちながら教育活動を行っていく教員の役割を自覚することになる。

6 身近な先輩や大学教員から教職モデルを得ていること

外部ではなく、大学の取り組みとして地域活動が行われることにより、活動が目に入りやすく、自分もやりたいという意欲につながっている。また、教職を目指す先輩の姿を見ることで自分の将来の姿のモデルを得て、教職の意義を見出し、教職への進路を決定している学生も多い。

以上6点の共通点を挙げた。地域活動の過程で学生が教職に対して意義を感じ、教員の役割を自覚し、自己研修を積み重ねて向上していくことが少しでも明らかになったのではと考える。

今後も、教職を目指す学生による地域活動を一層推進していくことが望まれるであろう。

謝辞

取材に応じていただきました信州大学土井進先生、上越教育大学濁川明男先生、茨城大学島田裕之先生、茨城県近代美術館学芸員山本哲士先生、富山大学竹井史先生、学生の皆さん、本当にありがとうございました。

〈引用・参考文献〉

- (1) 1997年7月3日に第1次答申。「はじめに、I教員に求められる資質能力と教職課程の役割、II教員養成カリキュラムの改善、IIIカリキュラム以外の免許制度の弾力化、むすび」から成る。
- (2) 「第1期『信大YOU遊サタデー』の概要」『信州大学教育学部における臨床経験カリキュラムの体験的構築－実践的指導力の養成－』2002年、144頁。
- (3) 上越教育大学フレンドシップ事業実行委員会『平成12年度フレンドシップ事業報告書』、2000年、2～3頁。
- (4) 同上、3頁。
- (5) 上越教育大学フレンドシップ事業実行委員会『平成14年度フレンドシップ事業報告書』、2002年、37頁。
- (6) 同上、38頁。
- (7) 中央教育審議会が1996（平成8）年、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」を発表し、「教員に強く要請される、[生きる力]をはぐくむ学校教育を展開するための豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を培う」ことを強調した。そこでうたわれている実践的な指導力養成のため、フレンドシップ事業が始まる。フレンドシップ事業は、1997（平成9）年度に、文部省が、「学生が子ども達と触れ合い、子ども理解を深め、教員とし

ての実践的指導力の基礎を習得する」ことを目的に、全国の教員養成系大学に推奨した。現在、全国の教員養成系大学・学部において、さまざまな形でフレンドシップ事業が展開されており、文部科学省の「平成9年度我が国の文教政策」の中でも、「フレンドシップ事業として、学生が子ども達と触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけられるよう、宿泊触れ合い活動や理科実験室などの機会を設ける等の取り組みを行っている」として紹介されている。

- (8) 上越教育大学フレンドシップ事業実行委員
『平成14年度フレンドシップ事業報告書』
2002年、38～39頁。
- (9) 島田裕之編『ワークショップHFのあゆみ－
茨城大学教育学部×茨城県近代美術館＝連携
活動の記録』、2003年、茨城大学教育学部、3
頁。
- (10) 同上、5頁。
- (11) ～(14) 同上、15頁。
- (15) 同上、17頁。
- (16) 同上、19頁。
- (17) 「富山大学親子フェスティバル報告書」編集
委員会編、『富山大学親子フェスティバル報
告書』、2004年、64頁。同上、4頁。
(平成20年1月15日受付、平成20年2月15日受理)

